

## トンボ

### 一、雨のステーション

季節外れの嵐に、ターミナル駅のコンコースは、色とりどりの傘をさげた人たちでごったがえしていた。すれ違う人は、おしなべて、早足で無口。うっとうしい雨に辟易しながら、帰路を急ぐ人、せっかくのデートだということにおしゃれが台無しになるのを空に呪う女の子達。

何のあてもない僕は、雨の日と夕闇が迫るこの時間が、妙に落ち着く。モラトリアムな生活をいつまで続けていれば、気が済むのか、自分でもよくわからない。

切り替えの上手な学生仲間は、大学卒業と同時にさっさとジーンズに別れを告げて、それなりのスーツ姿で、社会に適應していった。それぞれ、あんなにみんなで夢を分かち合っていたはずなのに・・・

そんな雑踏の中で、紺色のスーツに身を固めた、見覚えのある女性が、向こうからやってくる。なんとなく、ひるんだ僕は、気がつかない振りをして、視線をまっすぐに、そのまま擦れ違おうとしたのだが、「やあー」と相手から声をかけられてしまった。こうなると、無視するわけにもいかず、思わず立ち止まった。

「久しぶり。元気そうじゃない。」と、びっくりしつつ平静を装い、僕は、形どおりの挨拶を返した。

「まあね。会社勤めは結構大変よ。トンボは、相変わらずみたいで、うらやましいよ。」と、彼女が返してくる。

「よしてくれよ、その呼び方は。」と僕は答える。

僕は、のんきな極楽トンボの様な性格から、学生仲間に、トンボといつか呼ばれていたのだが、皆が就職して、ばらばらになってから、久しぶりにその呼び方を耳にした様な気がした。

「ねえ、もしよかったら、ちょっと飲んでかない。」

「うーん、俺、たいして金ないよ。」

財布に、少し飲むぐらいの金が無いわけではないが、こういう口実で断れば、あきらめるかなと思っていたが、この相手の場合は、そうはいかない。

「しょうがないなー。トンボの出世払いということで、今夜は、社会人

の私がおごってやるからさー。」

昔からユキには、男勝りで強引なところがあり、こうなると下手に抵抗しても、結局、口では勝てないことを悟り、あきらめることにする。

「少しだけだよ。今夜予定があるし。」

何の予定も無いのに、牽制球を投げたつもりが、見透かされて、「みえはってもバレバレよ。どうせ一人で、ビデオ見るとか、そんな程度の予定でしょ。」とユキが言う。

学生時代に皆で盛り上がった膝を下ろせる座敷のある居酒屋ののれんをくぐると、なんだかとても懐かしい気持ちになった。

## 二、雨の日のデート

そういえば、こんな雨降りの日に、この駅で待ち合わせて、よく彼女とデートをしたものだった。

ユキより二つ年下のユミは、今頃どうしていることだろうか・・・

駅前のスクランブル交差点を見下ろすビルの二階に二人の待ち合わせのカフェテリアがあった。外はあいにくの雨なのだが、一足先に待ち合わせ場所についている僕。交差点を通り過ぎるカラフルな傘の流れを眺めながら、必ず約束の時間に遅れる彼女のことをあれこれ想像して待つことに、こよなくささやかな幸せを感じたものだ。大好きな彼女のことだから、なおさら、あんまり頻繁に逢いたくはない。たくさん逢ったりすると、なんだかとても、勿体ない様な気がしてしまうし、どちらかという、逢っている時間より、逢わずにあれこれ相手のことを想っている時間のほうが、より相手を近くに感じるものだ。

そんな僕のことを彼女は、理解できないらしい。彼女の場合、逢いたい時には、急に電話してくるので、僕は無理に都合をつけて、待ち合わせ場所に行ってみるのだが、彼女の方は、時間通りに現われたためしが無い。

時間にルーズな彼女と約束の時間の三十分前には、必ず待っている僕。周りの人は、奇妙なカップルだといぶかしがる。

案の定、やや遅れてきた彼女と、カラフルな傘を二つさしながら、少

し距離を置いて、街を歩いたあの頃が、今となっては、とても懐かしい。

ユキとユミは高校時代からの部活の先輩後輩の間柄で、大学が同じになったこともあり、姉妹の様にキャンパスに一緒にいたものだ。ボーイッシュで、はっきりした自己主張のあるユキは、気まぐれで頼りない妹の様なユミの相談にのることが多かった。めがねをはずせば、とても美人のユキなのだが、同世代の男たちでは物足りないらしく、一人でキャリアウーマンの道を進むであろうことが、学生時代から想像出来ていた。僕との関係もユミを通じての彼女の姉御的な存在だった。女を感じずに、安心して何でも話せるところが、僕にとってもユミにとっても都合良かったせいもあり、二人の関係がギクシャクした時には、必ずといってよいほど、彼女が助け舟を出してくれていた。そういった意味で、僕は、今でもユキには、とても感謝している。

### 三、赤のマルボロ

飲み屋で一息ついたユキは、バックから赤のマルボロを出して、いかにもうまそうに、ゆっくりと煙を吐いた。彼女は、決してヘビースモーカーではないが、女性としては、かなり堂に入ったタバコの吸い方をする。アルコールは、並外れて強いので、僕には、どんなにがんばっても太刀打ちは出来ない。僕は、タバコに関して、これまでの人生で吸いたいと思ったことが無いし、友達にすすめられて、ためしに吸ったとしても、うまいと思った事が無い。アルコールに関しては、以前はまるでダメだったが、最近は、付き合いで多少はたしなめる様になったが、どう考えても、ユキとは互角に勝負するのは、あまりに無謀だ。せいぜい、食べ物をたくさん注文して、食べることに専念して、氣勢を逸らすのが得策だ。

今夜はユキのおごりということだし・・・

「まずは、二人の偶然の再会を祝して乾杯。」と、僕は少し皮肉っぽく言ったつもりなのに、彼女は何も感じない風だ。

ユキは、勢いよく生ビールのジョッキをぶつけて、音を立てて、豪快に飲み始めた。

「ところで、トンボは就職活動を本気で考えているのか、私は、いささか心配よ。そのあたり、どうなってるの？」

痛いところをついてくる。ほとんどピンポイントに近い指摘。もう一つのピンポイントで無い事に、少しほっとした僕。

「そちらこそ、OL一年生としての実社会の荒波の感想はいかがですかね。」と切り返してみた。

「今は、雑用とパソコンでの下仕事で手一杯ってところかな。ほんとに学生時代にもう少しパソコンをモノにしとくんだったなって、少し後悔してるのよ。いまさらとは思うんだけど、これでも週二回、会社の帰りに、夜のパソコン教室に通ってたりするのよね。」とユキは答えた。

「それはイイ心がけじゃないか。なんだったら僕が先生してやろうか。格安でね。」

「そのうちお願いね。会社に入ってみるとトンボもわかると思うけど、今の世の中、ほんとにIT無しじゃ成り立たない時代なのよね。うちの会社も今年からERPの何とかというパッケージが導入されて、すべての業務が、発生部署での分散入力とワークフローで動き出したから、キーボードたたかないと、営業部員といえども仕事にならないのよ。中高年の中間管理職の上司の人たちは、私以上にみんな大変みたい。折衝の仕事が出来なくても、パワーポイントで見栄えの良い提案書類が早く出来る若手の方が、会社としては必要としているみたいだし、パソコンたたけないばかりに、窓際になる人もいるみたいだし・・・」

「なんか、そんな風に自分の人生の大半を会社の為に捧げたあげくに、最後はリストラされていく運命なんか、僕はやだな。煮え蛙みたいだよな。」と、僕は、肉じゃがをつつきながら答える。

「何よ、その煮え蛙ってのは..」とユキが訊いてくる。

「蛙という動物は鈍感なんだよ。水の入ったナベに入れられて、ゆっくり火にかけられても、だんだん水がぬるま湯になり、やがて熱くなってきても気がつかずにいるものだから、やがて最後は自分が煮えちゃってるのもわからないものなんだよ。会社なんてどれも、資本家によって巧妙に仕組まれた大小さまざまなナベみいなモノで、その中で、ゆっくり煮立っていくサラリーマンは、やがて自分が煮えちゃう運命にある事にも気づかない哀れな蛙ってことさ。」と僕が解説する。

「でも、蛙だってえさを食べないと飢え死にしちゃうわけでしょう。今

の時代、普通の人、自給自足の農耕生活できるわけでもないし、会社というナベにでも入らない限りは、生活していけないんじゃないの？今の時代が、色々な問題を抱えているのは判るけど、生きていくには仕方ないことなのよ。」とユキが、サラリーマン社会を弁護する。

「ユキは、半年間で、ずいぶん現実主義者になったもんだよな。たとえどこへ就職したとしても、ナベは所詮ナベでしかない。僕は、ナベの外で、本来の蛙らしい人生が送れないかをもう少し探してみたいのさ。大学出て、すぐに会社というナベに入るだけが人生じゃないと思うんだよ。」

僕は、ここまで言い切ってしまう、なんだか自分としても、とてもすっきりした気分だった。

「やっぱり、あんたは極楽トンボの中の極楽トンボね。自分に正直でとてもよらしい。もう一度トンボに乾杯。」

ユキがお代わりしたジョッキから半分ほどのビールを僕のそれにわけてくれたので、思わず勢いで乾杯して、飲み干してしまった。

「ところで、最近ユミはどうしてるのかな？」とユキ。

僕は、一瞬視線を落として口ごもってしまう。

#### 四、海辺の家

ユミは、大磯の海辺の一軒家で、優雅な一人住まいをしている。両親は健在だが、父親の転勤で、両親は大阪の郊外の社宅で、今年の春から暮らしている。ユミの父親は、製薬会社の経理畑で、長年勤め続けていたのだが、定年間近のこの歳で、リストラの一環での人事異動があり、大阪勤務を余儀なくされた。ユミの母親は色々迷った末に、一人娘を自宅に残して、夫について行くことにした。子供も二十歳になり、女の子なので、自分で何でも出来るだろうという判断と、自分の両親の実家が大阪であったため、そちらに知り合いも多く、懐かしさから夫の定年までの気分転換に、住む場所を期限付きで変えてみるのも悪くないとの考えからだった。

ローンの終わった広い庭付きの一戸建てで、誰に気兼ねすることもなく、気ままな一人暮らしをしている一人娘のユミは、両親には、気ままな一人暮らしが味わえて悪くないと強がってはみたものの、寂しさを紛

らわすために、小さな子猫を海岸で拾ってきて飼いはじめていた。これまで、父親が動物嫌いなこともあり、猫も犬も飼ったことはなかったのだが、大阪で暮らしている両親には内緒で、庭先で餌を与え始めたのがきっかけで、気がつくといつしか家の中へ三毛猫を自由に行き来させるようになっていた。

メスの三毛猫は、気まぐれな性格で、いつもユミの家に居ついているわけではないのだが、人間の中では、ユミを一番信頼していると思われる。名前はトキと呼ばれていた。

「また、みんな呼んで、バーベキューパーティでもやろうか。」とユミが言っていたのは、いつのことだったろうか。

海に見える芝生の庭があり、一人暮らしで、誰彼に気兼ねすることなく、皆が集まって、わいわいやれるのが、彼女の家の都合の良いところだった。

僕は、仲間が就職してしまって、取り残されたような気後れがあり、彼女の両親がいない事をいいことにして、わいわいするのも気が引けてしまい、あいまいな返事しか出来なかったのを思い出した。

あの頃、梅雨明けの夏の強い日差しを浴びて、僕は毎日海辺に一人で出かけては、海水浴客の人ごみにまぎれて、沖に浮かぶイカダに乗って、万遍なく日焼けしながら、色々なことを考えて過ごしていた。

体が焼けて熱くなると、イカダから飛び込んで、沖の遊泳エリアを囲むブイまで泳いで行っては、腹ばいで海水の浮力に任せてプカプカと浮かんでみたりしていた。そして、体内の熱を冷まして、またイカダに戻ってごろごろするという繰り返しで、とてもその頃の自分に合っていた。沖に浮かぶかもめにあこがれて、自分が鳥になったイメージを膨らませてみたり、自分は海そのものだと思ったり、ともかく、自分が一個の人間であることに、なんだかしっくり行かないとでも謂えばよいのか、自分で自分のことを、どうしようもなく、ただ、もてあましていた。

このあたりは、西側に山を構えていることもあり、真夏といえども四時ごろには、太陽が山に隠れてしまうので、真夏の太陽が、山の頂に隠れてから、実際にあたりが暗くなるまでに三時間あまりもかかったりする。ゆっくりと海水浴場のざわめきが収まり、沖のイカダの子供たちの

賑わいが消えて、その日は、僕はうとうとと、うかつにもイカダの上で、居眠りをしてしまった。

ゆらりゆらりと揺れるイカダの上から、波の勢いで海に転がり落ちた僕は、そのままブクブクと海底まで沈んで行った。何も抵抗できずに息を吸うのだが、不思議と苦しくは無かった。そのまま海底で蛙の様に、手足で水をかくと、まるで魚のように自由に泳ぎ出すことができた。海底には、キスやコチやハゼが、じっとして警戒しているが、手を伸ばして捕まえようとする、するりとすり抜けて、なかなか捕まえる事ができない。海面を見つめると、弱まった夕陽の名残りの淡い光線が、ゆらゆらと海底を揺る様にきらめいていた。

斜め前方に目をやると、そこに、髪の長い若い女が、まるで人魚の様に滑らかに泳いでいた。僕は、必死で後を追い、長い髪や、足首を捕まえようとするのだが、何度やっても、もう少しというところで、たやすくすり抜けられてしまう。僕は、いらいらしながら、やがて意識がぼんやりして来て、こんな風にして、人は死んでいくものなのかと思うのだが、不思議と水を肺にいっぱい吸い込んでも、全然苦しくはなかった。

全身に汗をかいて、目が覚めたとき、あたりは、うっすらと暗くなり始め、砂浜にも、イカダの上にも、人の姿は無かった。ずいぶんと幻想的な夢をみていたものだ。西の方の海岸線に何気なく目をやると、ちょうどユミの家のあたりで、日没間近の夕陽の名残が何かに反射して、ピカッと光った。

今の夢の中の女のなまめかしいリアルな感触を残したまま、僕は、イカダから飛び込んで、今度は、しっかりとクロールで、岸まで、泳ぎ始める。だいたい水温が下がって、冷たい感触が、全身を気持ちよく引き締める。

家に帰ると、留守電にメッセージが残っていた。ユミからだった。

## 五、あの夜

僕は、恐る恐る留守電の内容を聞いてみる。

「あのう、ユミです。どうしてですか。別に用事があるわけじゃないの。もし良かったら、電話下さい。でも、私の家には、もう当分は、来ない

で下さい・・・じゃー・・・」

最初は、恐る恐る、やがては、何度も何度も再生してみる。声が少し震えているみたい。さびしいのか。落ち込んでいるのか。すぐにでも電話すべきなのか。でも、「もう私の家には当分来ないで下さい」とまで言われてしまえば、時間を開けたほうが、良いのか。

電話では伝わらない気持ちがあるのなら、直接家に行って話した方が、かえて良いのではないか。最後の「じゃー」の前後の長い時間の中にどんな想いがあるのか、一所懸命想像してみるのだが、判らない。

あの日、彼女からの誘いで、僕は、一泳ぎした後の夕暮れ時に、行きつけの海岸通りのレストランで、ユミと落ち合い、食事して、取り留めのない話に花を咲かせた。彼女にしては珍しく、待ち合わせの時間前に一人で雑誌を読みながら僕を待っていた。

少し、大人びた紫のワンピースに、いつもの様に化粧はしていないが、真紅の口紅だけをつけていた。僕は、それまで感じたことのない彼女の色気にどぎまぎしてしまい、まっすぐに彼女の目を見つめる事ができなかった。

かすかに香水の香りも漂ってくる。お母さんの置き土産でもつけてみたのか。少し背伸びしているつもりなのだろうが、努めて平静を装っているのが、僕にはわかってしまう。僕にしても、自分も、いつもとは違う彼女にドギマギしているのは、悟られたくないものだから、普段とは違う彼女の服装とかの話はせずに、最近の身の回りの出来事とかを差し障りなく話したりしていた。

「最近のユキは、すっかり社会人として大人になってしまって、少しさびしいよ。」と僕が言うと

「仕事が結構忙しそうで、付き合い悪くなったよね」とユミが答える。「でも、ハイヒール履いて、スーツ着て、化粧する様になったら、ずいぶんきれいになったと思わない？ あと、メガネはずしてコンタクトにでもすれば、完璧な今風の”きれいなお姉さん”て感じだよ。」と僕は、軽い気持ちで言った。

すると、ユミは、

「コウタは、メガネはずしたユミを見たことあるの？」と少し口を尖らせて訊いてきた。

「いや、どうだったかな・・・ 見たことあるような、ないような、よくわかんないけど・・・」と、僕は、正直に答える。

なぜだか、そこで会話が途絶えて、彼女が急に無口になってしまった。そのときには、その理由が僕には良く判らなかつた。

やがて、ユミがこう切り出した。

「たまには、家に遊びに来ない？ コウタ知ってるかも知れないけど、両親は今一緒に住んでいないし、住人は、私と猫のトキだけだし気兼ねすることは無いのよ。」

彼女の言葉には、何か相手に有無を言わさぬ強さがあり、「今日は遅いしこの次にしようよ。」と僕が言うのも気が引ける様な雰囲気があり、「じゃー、トキの顔でも見てみるか。」と僕は返事をした。

ユミの家までの道のりは、レストランから歩いて十分ぐらいだったが、彼女がリードするように早足で歩くものだから、僕は、少し後を追うような形になり、まわりからは、あまり会話を交わすことも無い奇妙なカップルと映ったに違いない。

ユミの家に着くと、待ち構える様にトキが尻尾を立てて、のどをごろごろ鳴らしながら、初対面の僕の足元にまとわりついた。

「なかなか、かわいい三毛ちゃんだね。おなかすいてるんじゃないのかな。」と僕が言うと、

「どっちが飼い主だかわからないのかしら。メス猫だからしょうがないのかもね・・・」とユミが言いながら、ドライフードの餌に、シーチキンの缶詰の餌を混ぜて、餌皿を置いてやる。すると、トキは、僕の足元から離れて、ゴロゴロの声を一層高めて、餌を食べ始めた。

「それって、僕は、人間以下の雄猫ぐらいの価値しか無いってことかな。しかも、その猫にしてみても、餌もらうまでの場つなぎってわけ？」と、僕は冗談を飛ばす。

「そうかもしれないね、動物は正直だから。コウタの心は、トキには見透かされてるかもね。」とユミが笑った。

二人して、トキが一心不乱に餌を食べつくす様を見ながら、「猫って

いいね。」とか「今度生まれ変わったら、絶対猫になって、毎日、ぐうたらなのうのと昼寝して暮らすのが、私の夢なの。」とかうれしそうに話す彼女の笑顔が、今でも僕には、忘れられない。

やがて、僕は、彼女に聴いてもらいたいと思って、テープに録ってきた、お気に入りの曲をプレゼントして、二人で聴き入ったりして、いい時間を過していた。トキも初対面の割には僕になついて、ひとしきり大きなあくびをした後には、ソファーに座っていた僕のひざの上で、渦巻きの様に丸くなり、スヤスヤと寝入ってしまった。僕は、そんなトキを見ているだけで、なんだかとてもいい気持ちになっていた。

ここまでは、とっても良かったはずなのだが・・・

話すことも無くなり、どうしようかと思っていると、ユミが、僕に訊いてきた。

「ところで、コウタは、今までに何人ぐらいの女の人と付き合ってきたの？」

思わぬ質問に、僕はドキッとした。どうしようか、正直に答えようか。でも、この歳で、ユミが初めてってのもかっこ悪いしな・・・

少し、迷った挙句に、思わず

「うーん、そうだなー、七人、いや八人かな。良く覚えていないから正確なところは判らないけど....」と僕は、精一杯答えた。僕は、何で、肝心なときに、そんなつまらないうそをついたのかと思うと、今でもとても後悔している。人生最大の後悔。

「ふーん、そうなんだ。意外ねー。結構多いね。」と彼女は、一見平静そうに答えた。

でも、二人の間の歯車は少しずつ、それをきっかけに狂い始めていたのだ。男女の関係なんて、どこまで、相手の前で、自分の気持ちを正直に誠実に出せるかによって決まるものなのだよ。

大きな教訓。

やがて、半年近く前のバレンタインの時に、話は及ぶ。女性の記憶力は、ある部分については、男の何十倍も、執拗で、残酷だ。

「だいが前の話だけどさ、二月十四日に、コウタは、結構たくさんチョコレートもらって得意になってたよね、全部でいくつもらったの？」

僕は、自分の置かれている状況が、いまだに飲み込めずに、調子に乗って、これはホントのことを答えてしまった。

「そうだな、今年のバレンタインは、これまでの人生で最大の収穫があったかな。全部で十二個か、十三個かだったかな」

ユミからの一個を除けば、ほとんどがサークル仲間のいわゆる義理チョコでしかなかったと冷静に言っておけば、良かったのに、そんなことにも気がついていなかったのだ。

「結構、サユリもミユキもリカもチカも、そして、あのユウコも俺のこと好きだったりしてね。」

これが、地雷となり、それを知らずに踏んだ僕は、空中に吹っ飛ばされた拳銃に、ユミの機関銃の餌食となる。僕は、自分の置かれた状況によろやく気がつくのだが、時はすでに遅し。ジ・エンド。

「何、言ってるのよ。本気でそんなこと思ってるの？ そんなことあるわけ無いでしょう。そういううぬぼれの強い男の人って、大嫌い。だから、男の人ってイヤなの。」

僕 = 男一般 = 嫌い。瞬く間に、彼女の脳裏に絶対的な論理方程式が完成する。

「じゃー、ユミはね、男の人から、いろんな女の人好きだけど、やっぱりユミが一番好きっていわれるのが、うれしいと思わないの？」と僕は言う。何を言っても、もうおしまいなのだからとあきらめればよいものを、僕は懲りずに言ってしまったのだ。

この言葉は、ある意味で、それまでの僕の本音でもあったのだが・・・

「色んな女の人を好きになったことがあるというのは、過去のことだし、私と出会う前だから、仕方ない部分もあるからあきらめるけど、でも、それにしても、そもそも八人というのは、多すぎよ。それから、私の場合は、色んな人の中で、一番私を好きって言ってくれる男の人より、私だけ好きって言ってくれる男の人がいいの。たとえ、うそでもいいのよ。私の前では、私だけって言う人がいいの。」

あの頃の僕は、あまりに若くて、おろかな男だったかを思うと、とてもはずかしい。でも、人生何事も経験を重ねてこそ明日があるとポジティブに考えるしかないのかも・・・

「僕は、なんでユミが好きになったかって言うとね、君は、一見頼りな

さそうだけど、芯の強い自分というものを持っていて、しっかり自立して、自分の頭で考えて、自分の足で、大地に踏ん張って生きている姿に、惹かれたんだよ。だから、もし、僕がいつか、交通事故で、死んじゃったとしても、その後も天国から安心して見守っていただける様な気がするんだ。」

「私って、そんなんじゃないよ。好きな人と、べたべたして、依存して、その人の為に尽くすのが、意外に好きなのかも・・・」とユミが反論する。

「男と女って対等だと思うんだ。お互いに、自立して生きていながら、刺激しあって成長していくのが僕の理想なんじゃないのかな。」と僕が言うと、

「私の場合は、違うの。男と女って、何が大切かっていうと、安らぎだと思うの。刺激なんて求めていないのよ。」というユミの一言に、脳天を直撃されて、自分はなんて馬鹿な男かと、思い知らされる僕。

それからというもの、何を言ってもダメで、最後は、「もう遅いから帰ってよ」と追い出されるように、ユミの家を後にした僕は、降り始めた雨の中、見るも無残な濡れねずみとなり、心の芯まで爆破されて、ひとりどぼとぼと、男泣きしながら、深夜の家路を重い足取りで歩むことになる。天国と地獄とは、この日のこの夜の僕の為に用意された言葉だったのだ。